

高崎 雄悟

## カール・マルクス「資本論」：構想力とコミュニケーションの本質

人々は皆その本質において想像を行う。想像力とは創造の可能性であり、人は何かを考える時には概念的に、そのもの事の構想について思考を行う。人は神のように無からの創出は出来ないが、ある程度経験に由来こそするが独創的に、ものを考える事が出来る。これが人を人たらしめる能力ではあるが利害関係や社会的権利の問題に至る所以でもある。一方で動物、マルクスが示す具体例で言うならば蜜蜂や蜘蛛は、我々の目から見ても精巧で見事な巣を創り上げる。しかしこれらの作業はこれ以上も以下ともならず、常に普遍的に同一の作業となる。これは動物のこの作業が本能的に行われるものであるからだ。この匠の技術にも似た作業はどの蜘蛛もが平等且つ正確に行えるものである。これは動物が本能的に持つ模倣の性質であると言える。これが彼らの生きる術なのだ。さてこの両者、根本的な性質は違うものの、その技術力や生み出される結果には大きな優劣はないように伺える。それでは一体何が最悪の建築師、もとい人間をこの機械にも似た作業をする蜘蛛や蜜蜂よりも優れていると定義させるのだろうか。人間にあつて動物にはない、その何が創造において人間を優位たらしめるのか。この文章では様々な観点からその違いを見出していきたいと思う。

それではまず、創造の行程から比較していきたい。動物は一部賢い(人間と同じように頭のなかで想像が出来る)もの以外は基本的には今までにない新しいものは作らない。いや、作り得ないという方が正しい。そこにある自然地形を利用し巣を作り、自分の持つ固有の能力と受け継がれた方法によって巣を創り上げ、目的を達成する。人間に例えるなら「伝統」であり、このスタイルは進化の過程でのみ、必要に応じて現状に適応するために変化させてきた。それ故急な環境の変化には弱く、森林破壊や大気汚染には敵わず、その結果に従うだけであった。ただこの性質には利点ももちろんある。洗練された構造は慣れた環境下においては抜群に活かされており、最適化されていると言えるだろう。一方で人間は、何かを作りたい、作らねばならないという目的意識を持つ。すると次は材料や道具を周囲から得る、あるいは言葉や声を使いその目的を達し得ようとする。模倣品を作るのは社会的タブーであり、他人とは違う自分でありたいという本人の自己顕示欲から、新しい何かが生産されるのだ。こういった社会的要因によって目的の段階で独創的な思考が誘発される、これが人間の行う構想の過程だ。ここで構想力という単語について少し定義付けを行っておく。構想力とは経験や先天的な能力を基礎として事物の構造について表像、表現するための能力である。それでは、人間と動物両者ともに備わっている様に伺えるこの能力はこの過程の中では必要不可欠なものだが動物にはこれだけしか存在していない様に考える。模倣の為には少しの記憶力と構想があれば事足りるためだ。それでは次に人間にあるべき能力は一体何なのだろうか。少し深く考察すると共にその目的について突き詰めた。

「想像力」これに尽きるのではないかと思う。何かを思い浮かべるといのは自然な事のように感じるが実は人間固有のものであると考えた。経験にこそ由来するが、それを発展させ独創性を付与する、人間が重要視する個性には必要不可欠だ。少し考察が停滞気味ではあるが、言葉の位置付けはこの様な感じである。構想とは表像、表現する能力であり、想像は変化と独創の能力だ。それでは何故独創性を持つのだろうか、その目的は何なのだろうか。人々はその本質において物事の価値を考える。このマルクスの著書は経済についてなので少しその話をすると、動物は互いを利用し合う事はあるが価値については求めない。一方で人間は何かにつけて価値を気にする。商品に対しては対価を支払い、関係に関しても平等を意識し、親切に対しても一定以上の見返りを求める。それは全く我々が価値を想像するからである。想像しないものは価値など求めず、生きられたらそれでいいという生存本能にのみ従う。だがしかし人間は感情を持ち想像を行うため利害関係を意識する。それ故、価値を想像せずに本能にのみ従う者を見下し利益意識を持たないと排除する。この一連の意識が模倣文化への優位意識に他ならず、人間が優れているという考えの由来だと考える。しかしこれだけでは人間の生み出した価値観による一方的な排他的行為である。価値の想像がどの様な点で優れているのか。それは一言で言ってしまえば可能性になるのだが、それについては詳しく後述したいと思う。

人は価値を見出す想像を行う事によって、社会の一員として機能している。利害関係は社会を機能させ経済を促進させる。だが実はこの社会的構造を機能させるためには変化が必要であるのだ。それは人の顕示欲と物欲を刺激し社会に実感を与える変化でなくてはならないと考える。それはいつでも可能性だ。変化の可能性は常に想像によってもたらされる。想像とは価値を考え、より良い方向へと持って行こうとする意識の表れに他ならないからだ。その、前よりも良いという向上が可能性であり、この可能性を想像し我々は価値の想像を行う。これが人間の社会的本質なのだ。人類の文明がここまで来たのも想像力が根底にあり、変化を嫌う動物に対して変化を望む人間として文明を発展させてきたのだ。それは生物においては非常に優秀な功績であり、この点においては優れていると言えることができるだろう。

しかし同じ人間でありながら経験し得ないものさえも想像することが可能な点に少し驚きと疑問をもつ次第である。一体想像力とはどの範囲まで影響を及ぼし得るのだろうか。限界など存在するのだろうか。これに関しては明確な答えは言及できないが、思うに限界を考えることこそが限界なのではないか考える。限界とはそれ以上を否定することで成り立ち、自らの思考が限界と定めることでのみ成立するのであろう。想像は自由だ。何かを作ることは素材や資源、また技術や現実的かどうかで決まる。しかし想像とは要因に由来しない。想像は価値を付与するが想像自体に絶対的な価値はないし、それ自体は何も生成し得ない。そこに無限の可能性とある種の有限性を含むアンチノミーが形成されるのだ

ろう。だとすると想像とは固有の独創性でありながら共有行いう一種の概念とも言えるだろう。これについて最後に考察を行い、結局この議題に置いての人間の本質は何かということまで突き詰めたいと思う。

想像は独創性を求め価値を付与する一方で、それを共有し同意を求める概念の能力でもある。動物にとって価値とは必要のないものである。本能において必要と判断されたものを構想力とわずかな記憶によって構築し、進化の過程で発見された安定した生き方を目指すのが生物として、生態系を崩さず世界の秩序を守る為のルール、あるいはその手段だったのである。ところが人間は創造物の共有で互いの価値を比較するのだ。この共有によりもたらされる多様性とはさらなる可能性に繋がり、これは生物として、発展と向上を求める上で非常に自然且つ合理的な行動なのである。具体的にこれは何を指すのか。そう、コミュニケーションである。人々は他者との競合や共有において自己の価値を理解する。お互いの想像力に依存した上でコミュニケーションを行うわけだ。これは他律的に生きているという人間の性質を表し、人間が非常にアクティブな社会的動物である事を示している。コミュニケーションの中で人は進化し文明を発展させてきた訳だ。少し想像力の定義に説明を付け加えるならば他者の構想に客観的価値を付与する、とすると具合が良い。これこそが人間の本質なのであるから。この文章の冒頭で述べたように人間は本質的にコミュニケーションの中で想像力を働かせ価値を付与する。この過程において人類はここまで変化を遂げる事が出来たのだ。人類は幸福を望み、より良い暮らしを求める。この向上の意識が発展を促したのは紛れもない事実であるが、この価値観を理解できるのも想像力を持った我々人間だけなのだろう。

動物の保守的な傾向に対して、変化を求めそれを想像の共有によって実現する事を本質とした人間。それは両者ともそれぞれの暮らしの上で理にかなっているのだろう。多様性を含むコミュニケーションは新たな可能性を生み人類を発展させてきた要因となっている。その可能性は価値によって成り立ち人間のもつ想像力がそれを可能たらしめる役を担っているのだ。その限界を定めない点においてあらかじめ規定された模倣文化の否定につながったのだろう。これこそが人間の観念的な想像を持つ事が優れているとされている所以である。私たち人間は、想像し構造(表像、表現)する点で優れていると考えたのだ。それでは遠い未来に私たちはどのような可能性を望むのだろうか。批判的に言うならば我々の規定によって成り立つ価値観の世界に意味などあるのだろうか。どうかこれに対しては限界を定めず己の想像力に身を任せる事で可能性を広げ続けるべきだと考える。その可能性の先に我々の目指すべき真の本質が存在しているかもしれないのだから。その本質を追求すべく、人間らしく他者との関わり合いにおいて見出していくべきだと提案する。想像力によってのみ私たちの存在意義というものは規定されるのだ。